

## 祖先・私・子孫をつなぐピコ（へその緒）の名

— 現代ハワイ先住民による自己の再帰的プロジェクト

竹村初美

《さみしくなったら、おへソを見よう。》<sup>1</sup>

《私》は孤独な存在ではない。疑うなら、上着の裾をまくってみるとよい。

へそは、《私》が系譜に結びついていることの見える証拠である。日常の起居には役立つが、想像力の働かせかた次第で、帰属感という心理的利益をもたらしてくれる。

ところで唐突だが、ハワイ先住民の伝統的・民俗的な思维において、《さみしく》なることから《私》を救い出してくれるのはへそだけではない。「つむじ」と「生殖器」もまた、へそと同様に「つながりの器官」とみなされるのだ。これら三つの身体器官は、ハワイ語では「ピコピコ」という一語で総称される。

本稿では、このピコという言葉が登場する一篇の詩を読んでいく。プアナニ・バージェスという先住民の女性が一九八九年に発表した詩だ。複数の民族的出自をもって生まれてきた彼女は、人生の途上で自らをハワイ

先住民と同定するようになった。そのことを、彼女はピコという語を用いて詠う。この伝統的・民俗的概念を足がかりに、彼女は自らのハワイ先住民系譜を再創造しようとしているのだ。

詩の読解によって得られた結論は次の三点である。第一に、詩人はピコという伝統的な概念を流用 *appropriate*・再活性化し、自らが現在置かれている状況に対応するための文化的資源として利用している。複数の民族の出自をもって生まれてきた彼女の 에스ニック・アイデンティティは拡散しがちである。しかしピコは、彼女を一つの共同体につなぎ止める象徴的紐帯の役割を果たしているのだ。第二に、ピコの名を獲得したことを、彼女はある程度まで受動的な経験として受け止めている。 에스ニック・アイデンティティを探索していくうち、彼女は民族共同体への帰属感を得ることに成功した。しかしそれは《私》が能動的に行ったからではなく、《何ものか》にそうさせられたのだ、という認識が、この詩にはうかがえる。第三に、この詩は、根源的な存在基盤（マトリクス）とのつながりを取り戻そうとする探求の軌跡だと言える。個人が自らの 에스ニック・アイデンティティを探索するとは、統一的な自己像を求めて過去を探ることである。フロイトやエリクソンの言うように、起源の追求は人類共通の普遍的願望から発する行為である。彼女もまた、マトリクス＝母胎への再接続を求めて個人的な探求を行う。そして彼女はここでも、ピコ（へその緒）のイメージを活用するのである。

これらの結論を通して見えてくるのは、現代に生きる一人の探求者の姿である。彼女はピコという伝統語を手がかりに、「私の物語 *my story*」と「ネイションの物語」を再帰的に構築しようとする。それは社会学者 A・ギデンズが、「自己の再帰的プロジェクト」と呼ぶ行為に相当するものだ。 에스ニシティの探求を通して「私の物語」を構築していく彼女の姿を、この詩は映し出している。

以下、本稿では、(一) まず詩の内容を紹介し、「三つの名前」の一つ一つに負わされている意味を確認する。

(二) 次に、「ピコ」という語について解説する。(三) さらに、「名前を選ぶ」という題名に注目し、アイデンティティの再構築とその主体の問題について考える。(四) そして、アイデンティティの探求の途上で生み出される「物語」の性質について論じ、稿を閉じる。

### P・バージェス「私の名を選ぶ」

プアナンニ・ヨシエ・バージェス Punani Yoshie Burgess は、ハワイ先住民を母に、日系アメリカ人を父に生まれた。先住民系の住民が多いオアフ島ワイアナエ地区の出身で、同地域で長年ソーシャルワーカーとして活動してきた。ハワイ人コミュニティ活動の指導者としても知られ、ハワイ大学の都市地域計画学部で講師を務めたこともある。

バージェスは一九八九年、「私の名を選ぶ」*Choosing My Name* という詩を発表した。自らのエスニック・アイデンティティについて平易な文章で記したこの詩は、現代ハワイ詩のなかでもよく知られた作品の一つである。

私が生まれたとき、母は私に三つの名前をくれた

クリスタンベルは、私の「英語の」名前だった

私の社会保障カードの名／学校での私の名

教師が私に「本当の」名を尋ねたときに答える名

私の安全な名

ヨシエは、私の家での名前だった

私の日常の名／父の家族を思い出させる名

私が日本人であることを思い出させる名

たとえ私の鼻が、脚が、太くても／彼らが私を受け入れられるようにする名

ハワイ人である私の母を、「クロイ」「黒い」と呼んだ彼らが

せめてもの取り柄である名前 [My saving name.]

プアナニは私の選ばれた名だ [Puanani is my chosen name.]

私をアーイナ〔大地〕に／カイ〔海〕とポツエ・カヒコ〔古い人々、祖先たち〕につなぎ戻す、／私のピコ

（へその緒。詳細は後述）の名 [My piko name connecting me back to the 'āina/ And the kai and the po'e kahiko.]

私の祝福、私の重荷、／私の護符、私の槍

（文中、「」でくくった部分は引用者による注。）

第三節に表れている素朴な本質主義を批判することは容易だ。あくまで「アカデミック」に振る舞おうとするなら、歴史性を捨象する民族主義的なセンチメンタリズムと切つて捨てることもできる。あるいは逆に、政治的な立場を鮮明にし、先住民の精神的脱植民地化を支援するという立場に立つこともできよう。その場合はこの詩を、被抑圧者による対抗的なアイデンティティ主張として読むことになる。だが筆者はいずれの立場にも与しない。疎外感に悩みつつ帰属先を探し求める「私の物語」として、この詩を読んでいくことにしたい。

## 一 「二つの名前」

《私が生まれたとき、母は私に二つの名をくれた。》

## 二つの名を捨て、ハワイ名を得る

名前は個人の生活史の重要な要素である。名前の変更は、常に自己アイデンティティの変容をともなう。ここではまず、バージェスの「二つの名前」について、一つずつ確認していくところから始めよう。

母から与えられた三つの名のうち、英語名クリスタンベルは、大きな社会で通用する公式の名だった。「学校」で、あるいは「社会保障カード」に、彼女はこの名を用いた。「安全な名 my safe name」だが、官僚制の冷やかかすと、合衆国による植民地化の歴史が刻印された名だ。

日本名ヨシエは、父親の親類たちを受け入れてもらうための名だった。英語名の社会よりも小さな社会で、その一員と認められるための名である。ただし日系親族の共同体は、彼女を二級の成員とみなしていた。親族たちは大きな尻や平たい鼻、太い脚という身体的・可視的な差異、そして「黒い」母親を理由に、彼女の自尊心を傷つけた。<sup>2</sup>

これら二つの名には過去時制（「名前だった」: was my … name）が用いられている。英語名と日本語名はもはや《私》の名ではない。それぞれの名が体現する社会も、《私》にとってはもはや「彼ら」である。《私》とこれらの集団とは、今や心理的な境界線で隔てられている。<sup>3</sup>

残ったのはハワイ名プアナニだけだ。この名は英語名や日本語名のように安全<sup>safe</sup>でもなく、彼女を保護saving<sup>saving</sup>もしない。むしろそれは《重荷》である。それでもこの名は《祝福》であり《槍》であると彼女は言

う。

ここで行われているのは価値の転換である。抑圧を受けてきた人々の文化的特徴は、しばしばマイナスの符号を付されている。その文化的特徴を、逆に肯定的に定義し直すのが、価値転換の戦略である。これは多くのマイノリティ運動でとられてきたものだ（石川<sup>4</sup>）。英語名と日本語名が象徴する環境は、彼女にとって抑圧的なものだった。バージェスはこれらの名を拒み、あえて周縁的なハワイ名を名乗る。ハワイ名はその価値を転換させられ、支配的な価値に抵抗するための《槍》として、また彼女をエンパワーする《祝福》として、再定義される<sup>5</sup>。

英語名・日本名とは対照的に、ハワイ名には「名前だ's my name」と現在形が用いられている。バージェスのエスニック・アイデンティティは、いわゆる「雑種性」を志向しない。三つの名のうち、残ったのはハワイ名だけだ。他の二つのエスニシティは排除され、心理的な境界線が引かれる。唯一の「ピコ（へその緒）の名」によつて、彼女はハワイアン・ネイションという心理的な帰属先を獲得する。アイデンティティの拡散はこうして防がれる。

### 「先住民であること」の不確かさ

この詩の背景にあるのは、ハワイ先住民のエスニシティを取り巻く社会的な事実だ。「ハワイ先住民であること」は、外形的には総じて脆弱な基盤しかもたない。ハワイ大学の人口学者ロバート・C・シュミットは、これを次のような警句で言い表している。——一七七八年、ジェームズ・クック船長が船を降り、先住民と初めて接触したとき、ハワイ諸島には何人のハワイ人が住んでいたか。これは昔から議論されてきた問題である。ところで、今日ここには何人の先住民が住んでいるのか。これまた、長らく決着のつかない問題である

(Schmitz 31-32)。混血の進行した状況にあつて、ハワイ人とはいったい誰であるのかを外形的な基準に基づいて定義することは難しい。「ハワイ人であること」の最終的な決め手となるのは結局本人のアイデンティティの持ちようである、とある人口統計学者は結論している。(Fu 70)。

ではその「本人のアイデンティティ」は、どのように形成され獲得されるのだろうか。一つの示唆を与えてくれるのは、社会学者A・ギデンズの《自己の再帰的プロジェクト》という概念である。

モダニティのポスト伝統的秩序のなかで……、自己アイデンティティは再帰的に組織される試みとなる。自己の再帰的プロジェクト *reflexive project of the self* は、一貫した、しかし絶えず修正される生活史の物語にその本質があり、抽象的システムを通じた複数の選択の中で実行されうるものである (5)。

ある人のアイデンティティは、《特定の物語を進行させる能力》のなかにある、とギデンズは言う (59)。バージェスは、自らの名前に関して複数の選択肢を与えられていた。その彼女が、人生の途上で「私の名前はプアナニである」と思い定めるようになった。ギデンズの用語を借りて言い直すなら、バージェスは自己の再帰的プロジェクトの過程を経て、「私はハワイ人だ」という生活史の物語を構築したのである。三つの名前という複数の選択肢の中から選択と破棄を行い、自己アイデンティティの物語を組織化したのだ。

自らのハワイ性を内的に同定し、「私はプアナニである」という生活史の物語を構築する。その過程で重要な働きをしたのは「ピコ」という概念だった。次節ではこの言葉について確認しよう。

## 二二 ピコ——祖先・《私》・子孫をつなぐ、へその緒・つむじ・生殖器

《私をアーイナに／カイとポツエ・カヒコにつなぎ戻す、／私のピコの名》

### ピコの伝統的な語義

「ピコ」という単語を理解するには、まずハワイ語一般の特徴を知る必要がある。この言語の主な特徴の一つは、語義の多層性である。一つの語が多く語義をもっており、文脈に応じてその意味が変わってくることに頻繁に生じる。たとえば *kumu* という一語は、「(物体の) 底部、(樹木の) 幹、根本となる部分、(技芸の) 教師、模範、(事物の) 起源、(編み細工の) 編み始めの部分」など、さまざまな語義をもつ。ピコという語にもまた、以下のような複数の語義がある。

#### ①. へその緒、へそ —— 《私》と母との絆

これはピコの最も基本的な語義である。へその緒は母子の直接的な絆であり、へそはその痕跡である。へその緒とへそは、最も近い肉親との最も確実なつながりを、目に見える形で保証する。<sup>7</sup>

#### ②. 泉門・ひよめき・つむじの周辺 —— 《私》と祖先との絆

伝統的に、人の頭(ポツオ *po'o*) の上は「アウマークア *aumakua*」が漂う場所とされた。アウマークアとは祖霊のことで、トカゲ・鮫・フクロウ・亀など、動物の姿をとって現れる。頭は「ウハネ *uhane*」(霊) の出入り口でもある。<sup>8</sup>

ポツオのうち、前頭部の泉門は特にピコと呼ばれた。泉門とは新生児の頭蓋のうち、まだ骨化しておらず柔らかい部分のことである。(脈拍に合わせて「ひよひよ」と動くのが見える様子から、日本語では「ひよめき」とも呼ばれる。)この「頭のピコ」は《象徴的なへその緒》である、とハワイ民俗学者のM・プクイらは言う。頭のピコは、人間と祖霊とを結びつける箇所なのだ(Pukui, et al. 2:183)。「私」はこのピコで祖先の系譜に結びつけられている。(ピコには派生的な抽象語としての用法もあり、この場合ピコは、「祖先との系譜的なつながり」「系譜上関わりのある死者とのつながり」を、より直截に意味する。)

### 〈3. 生殖器〉——《私》と子孫との絆

「ピコ」の第三の語義は「生殖器」である。男女双方の性器にこの語は用いられる。

生殖器とは、《私》を親にしてくれる器官である。個体としての《私》の生涯は、出生に始まり死に至る、有限な直線に閉じ込められている。<sup>10</sup>だが生殖器の働きによって、《私》は系譜に連なることを許される。身体の一部である生殖器のおかげで、《私》は未生の子孫に結びつき、祖先たち(ナー・クープナ *na kupuna*)の列に加えられる。個人の生よりも大きな物語に、《私》の存在は組み入れられるのだ。

ハワイの伝統社会において、生殖器は敬意とケアの対象であった。特に高位首長(アライイ・ヌイ *ali'i nui*)たちの生殖器は人々の尊崇の対象とされた。ハワイの民俗歌謡(メレ *mele*)にメレ・マイ *mele mai* というジャンルがある。これは特定の首長の性器を誉め称える歌である(Pukui, et al. 1:183)。世界各地に見られる性器崇拜の風習は、王の生殖能力が宇宙の豊穡と密接に関わるという信仰に基づいているが、メレ・マイも同様の観念に支えられている。

以上三つの「ピコ」は、いずれも身体器官を指す言葉である。どの器官も、それぞれの仕方ですべて系譜と関わっ

ている。へそは母に、つむじは祖先に、生殖器は子孫に、《私》を結びつける。《私》の身体各部は、過去・現在・未来を貫通する軸の結節点なのである。

#### 〈4. 隣接地との境界線〉

この意味でのピコは、隣り合う地所と地所とが接する境界線を指す。境界線とは、ある空間とある空間とを隔てる線であると同時に、両者を結びつける線でもある。「つなぐこと」と「分節すること」との表裏一体の関係を、この用法は示している。<sup>11</sup>

#### 〈5. 植物の葉と茎の境目〉

植物の葉と茎とがつながっている部分もピコと呼ばれる。ここでもつながる・結びつくというイメージが働いている。

#### ピコ概念の再活性化

このように、伝統的な概念としてのピコは、《私》と血縁者をつなぐ身体部位、または何かと何かがつながる部分を指す言葉である。パージェスがこの言葉を用いて言おうとしていることは、自ずから明らかだろう。ピコの名は、彼女をハワイの自然と系譜とに「つなぎ戻す connecting me back」。へその緒が母子を結びつけるように、「ピコの名」は彼女をハワイのアーイナ（大地）、カイ（海）、ポツエ・カヒコ（古い人々）、祖先たち）に結びつける。この絆の名によって、《私》と先住民系譜との間にあった断絶は乗り越えられ、《私》と自然との間の疎隔も取り払われる。《私》の人生という小さな物語は、ラーファイ・ハワイイ Iahii Hawaii（ハワイ

アン・ネイション)の大きな物語のうちに包摂される。

彼女のピコ概念は、伝統文化資源の断片をピックアップし、脱文脈化して再解釈を加えた、独特なものである。彼女は、この伝統的な概念を流用 appropriate し、自らが現在置かれている状況に対応するためのエンパワメントの手段として利用したのだ。当然それは、伝統的なピコ概念とは異質なものになっている。個人を大地と海につなぐピコというイメージは、明らかに彼女の創作である。

伝統概念のこうした再構築は、個人的なアイデンティティ探求の過程で行われたものだ。ハワイの民俗伝統は、個々の先住民の行為や存在の枠組みを分節化する機能をとうに失ってしまっている。<sup>12</sup> その中で彼女はなお「確かなもの」を求め、ラーファイ・ハワイイ(ハワイアン・ネイション)というゲメインシヤフトとのつながりを実感しようとした。個人的な探求として始まったものが、最終的には集団的なエンパワメントを旨とするものとなったのである。

評論家のA・アッパデュライは、『文化主義 culturalism』という概念を提唱している。文化主義とは現代のエスニック・ナショナリズムの一つのありようを指す言葉だ。文化主義の参加者たちは、意図的に運動を形成している途上にあり、しかも彼ら自身そのことを自覚している。彼ら自身のエスニック・アイデンティティもまた、自覚的な形成の途上にある(15)。バージェスの探求もまた、文化主義的な模索と言えるだろう。彼女はアッパデュライの言う『想像力のわざ』によって、祖先たちの非歴史的共同体と自らとをつなげようとしている。

### 三 「私の名を選ぶ」のは誰か

《プアナニは私の選ばれた名だ。 Puanani is my chosen name.》

複数の中から選び、かつ、懐疑を乗り越える

バージェスにとって《私》の名は、クリスタンベル、ヨシエ、プアナニのいずれでもありえた。エスニシテイの帰属に関して、複数の競合する選択肢が同時に存在したのである。《ハイ・モダニテイの条件下では、社会生活の多くの領域において——自己の領分を含めて——決定的な権威が不在である》とギデンズは言う。現代人は、多くの選択肢が競合し合う状況のなかに生きている。<sup>13</sup> 前近代社会では伝統が《単一の権威》だったが、現代の多元的状况に生きる個人は無数の選択の自由に取り巻かれている。そして、とギデンズは続ける。このとき個人は、必然的に《懐疑》の原則に動かされる (222)。

ギデンズのこうした指摘にもかかわらず、バージェスの詩に見られるのは、むしろ懐疑をはねつける強い態度である。英語名と日本語名に訣別し、ハワイアン・ネイションのみ帰属すると、この詩は宣言している。この迷いのないコミットメントをどう理解するべきだろうか。ヒントは、この詩の題名でもある《私の名を選ぶ my chosen name》という表現に隠されている。

《私》が選んだ《私》——主体性に焦点を置く解釈

バージェスにとって、先住民アイデンティテイの獲得および維持は、外形的な基準の拘束の下になされたことではない。規範や社会的圧力によってハワイ名を名乗るようになったわけではないのだ。では、彼女は自ら

の意志でハワイ人アイデンティティを選んだのだろうか？　そしてこの詩は、《私》自身が《私》の名を選んだという主体性の勝利宣言として、また能動的な《自己の再帰的プロジェクト》の表現として、読まれるべきなのだろうか？

ために、この方向に沿ってこの詩を解釈してみることにしよう――

与えられた三つの選択肢――アメリカ人の《私》・日本人の《私》・ハワイ人の《私》――から、《私》は一つの系譜を選んだ。それは《私》が選びとった《私》のアイデンティティでありライフスタイルである。バージェスの詩は、こうした主体性の勝利を言い表している。

前近代社会において、伝統は「外的な基準 *external criteria*」(ギデンズ)として個人に課されるものだ<sup>14</sup>。系譜もその一部である。しかし今日、とりわけ複数のエスニシティを有する個人の場合、選択可能な系譜のうちいずれにコミットするかは、ある程度まで当人の裁量に委ねられている。個人は「文化的資源のストック」にアクセスし、当人が実際に置かれている状況に合わせ、有用な「意味の断片」を選び出す。個人が自らのアイデンティティを、選択可能な情報から構築することは、ある程度まで可能である。

バージェスも、取捨選択によるアイデンティティ構築を行っている。彼女は三つの名前という文化的資源のストックから一つの断片を選び取り、「私の物語」を再構成した。自らの選択の結果、《私》は先住民に「なる」。ハワイ人プアナニというアイデンティティは、《私》が選択し構築したものである。

――というような、自己の可塑性を強調する解釈でもありうる。この場合バージェスは内的準拠性に基づいて「私の物語」を作り上げた、ということになる。伝統の喪失にともなう文化要素の断片化、恣意と選択にも

とづく個人のライフスタイル形成といった、現代社会の一般的傾向に即した解釈と言えよう。<sup>15</sup>

「私の選ばれた名前」——受動性に力点を置く解釈

しかし、主体性に力点を置くこうした解釈では、この詩の一面をしか捉えることができない。実のところこの詩には、受動性を示すしるしも散りばめられている。《私》の主体性を強調しすぎると、それを見落としてしまう。

「私の名を選ぶ『Choosing My Name』という題名は、たしかに《私》の主体性の高らかな宣言、能動性の凱歌とも読める。しかしここで「選ぶ」という動作の主体は明示されてはいない。本文中にも《私の選ばれた名 my chosen name》という表現が見える。ここでも「選ばれた chosen」という受動態の動作主体は明らかでない。《私》の名を選んだのは誰か。それは《私》ではなく、受動態のうちに隠された「何者か／何か」であるのかもしれない。つまり問題は、「自律」か「他律」かということである。「私が選ぶ」という自律か。「なにものか」による選びという他律か。プアナニをピコの名として選んだのは「誰」なのか。

「外部」からの命令に従ってある名を名乗ることは、共同体への強いコミットメントの意識を作り出す。《「伝統」はつねに「拘束的」な規範的性格を持つ。さらに「規範的」とは、ここでは道徳的要素を含んでいる》（ギデンズ 1964）。外部から個人に与えられる命令は、道徳的な要素を含んでいる。共同体への道徳的なコミットメントの感覚は、それが《私》の選択を許さぬものであること、「外形的基準」からの要請であることによって強化される。選択の余地がないところに懷疑は生じない。

拘束的なものもつ道徳性については、B・アンダーソンの議論が参考になる。アンダーソンは、その近代ナシヨナリズム論のなかで、「選択されたものではない故にそこに差す後光」に注目する。ナシヨナリズムの

根底には、人が自らのふるさとに感じる《自然のきずな》がある。それは《ゲメインシャフトの美》とも言うべきものだ。《そうしたきずなのまわりには、それが選択されたものではないというまさにその故に、無私無欲の後光がさしている》。《私》とふるさととは、「自然に」結びつけられているのでなくてはならない(236)。

バージェスの「ピコの名」にも同じことが言えそうだ。《私》のピコ(また《私》の身体と存在そのもの)は、《私》の選択によらず外部から与えられたものである。「ピコの名」という表現も、それが自らの選択を介さず与えられたものであることを示唆している。さらに詩人は、ピコを介した《私》と大地とのつながりも、《私》の選択によらず与えられたものと仄めかす。

では、《私》に「ピコの名を与えた「何ものか」とは何なのだろうか。それは人類学者のM・フィッシャーが『イド的なもの』の啓示」と呼ぶものに関わっている。

フィッシャーは、エスニシティを探求する個人が「明示されえぬもの」からの啓示を体験することについて述べている。彼はまず、一九七〇年代から八〇年代のアメリカ合衆国でエスニック・マイノリティの自伝が多数出版されたことに注目した。それらのテクストに記されているアイデンティティ探求の営みは、『何か新しいもの』(363)であり、『二十世紀末の多元的な脱産業社会の探求の形式の重要なもの』である(362)。これらの探求者たちをつき動かしているのは、『何かダイナミックなもので、しばしば抑えきれない、避けがたいもの』だ。それは認知的な言語や知識として掬い取れない、『何か非常に困惑させられるもの、何か手に負えないような代物』である(363)。エスニシティには『潜在力』があり、それはアイデンティティの感情的部分に深く根ざしている。自らのエスニシティについて明示的な知識をもたない個人に対して、『埋もれていたもの』が突如『表面に出てくる』ことがある。フィッシャーはそれを『イド的』な力の表れと呼ぶ(365)。

イド (E) は、元来フロイトが用いたように、単にそれ (das Es)、経験の非人称性であり、ドイツ語圏の子供にとつて特に心強い味方なのだが、子供がそもそも中性名詞——ダス・キント——であり、だんだん成長してはじめて認知され性別のある個人という自己になるのである。このように、個人の本質的存在に関わる何かを認識することは、個人が直接意識し制御しているものの外部に根ざしながら、なおかつ自己定義の努力をも求める (365)。(強調引用者)

「私の選ばれた名 my chosen name」という受動態もまた、このような経験を暗に物語っているとは考えられないだろうか。<sup>16</sup>《私》は、《イド的なもの》の啓示によつて自らの存在に関わる「何か」を認識させられ、自らの「本質」を表すピコの名を与えられた。そしてそのピコの名は、彼女に《自己定義の努力をも求める》。つまりこの詩そのものが、「ハワイ人ブアナニ」としての自己定義の告白に他ならないのだ、と。

このように解釈するとき、「自律か他律か」という問いは解決へ向かいそうに思われる。自律か他律かという二項対立ではなく、自律性と他律性は相補的な関係にあるのだ。ピコの名は「外部」によつて他律的に与えられたと同時に、彼女自身が主体的に定義する必要のあるものである。「私の選ばれた名」の獲得は、他律の結果であり、またそれに続く自律の結果でもあるのだ。

ところで、本人の自律的な《自己定義の努力》の過程で産出されるものがある。それが「物語」である。<sup>17</sup>次節では、個人のアイデンティティの探求と「私の物語」の創出について考えてみよう。

#### 四 「私の物語」の創出と道徳的共同体への(再)帰属

《私をアーイナに／カイとポッエ・カヒコにつなぎ戻す、／私のピコの名》

##### 断絶と忘却が生む「私の物語」

《私》が何者であるのかを理解するには、自分がどのように成り立つてきたのかを知らねばならない。しかし《私》の成り立ちとは、しばしば《私》の知らない空白に囲まれている。アンダーソンは次のように述べている。

幼児から大人になるまで、何千の日々が思い出のあなたに消え去ってしまうことか！ 黄ばんだ写真の中で毛布やベッドの上で幸せそうに寝そべっているこの裸の赤ん坊があなただということを知るのに他人の助けが要するというのはなんと奇妙なことか。写真、つまり、この複製技術時代の申し子……が同時に、ならかの外見的連続性を記録し、それが記憶から失われたことを強調する。この疎外から人物（パーソンフッド）、アイデンティティ……の概念が生まれ、そしてそれが「記憶」されえないものであってみれば、語られるほかない(333)。

《私》のなりたちを知ろうにも、《私》は自分の過去から疎外されている。《私》と記憶されえないものとの間には断絶がある。だが、とアンダーソンは言う。物語とは、まさにその忘却から生まれるものだ。断絶の自覚が、物語を創出するのである。

意識の深刻な変化はいつでも、……特有の記憶喪失をとまなうものである。そうした忘却のなかから、ある特定の歴史的状況の下で、物語（ナラティブ）が生まれる（332）。

同じことが国民の物語についても言える、と彼は続ける。

世俗的、連続的な時間に埋め込まれているという意識、そうした時間はそれ自体連続性を意味するのに、この連続性の経験を「忘れていく」という意識……——これが「アイデンティティ」の物語の必要を生み出す（334）。

アイデンティティを探求する個人や集団は、なぜ物語を語るのか。それは、過去との連続性の感覚を回復するためだ。ここで、《私（たち）》と共同体との「再接続」ということが問題になってくる。

#### 道徳的な共同体への（再）接続

断絶の克服と再接続への希求は、バージェスの詩にも顕著に表れている。それを端的に表しているのが、「つなぎ戻す connecting me back」という表現だ。大地、海、祖先たち——ゲメインシャフトを構成するこれらの要素から、《私》はかつて隔てられていた。だが《私》のピコの名が、両者を「つなぎ戻す」したと、詩人は詠う。ピコの名が、忘却の谷を橋渡ししたのだ。ピコは、個人を共同体につなぎとめる紐帯の可視化されたイメージである。ピコの名は、拡散しがちな《私》のアイデンティティをゲメインシャフトにつなぎ戻す、象徴的な紐帯である。このへその緒によつて《私》はマトリクス（母胎）に接続され、存在論的安心を供給される。<sup>18</sup>

ピコの名は《私》をポツエ・カヒコ（祖先たち）につなぎ戻した。ピコという語が想像力への経路を開き、アツパデュライの言う《想像力のわざ》<sup>19</sup>によって、《私》は系譜につなぎ戻された。こうして《私》は、集団的な生命の連続線の上に位置づけられる。消失していた記憶は回復され、《私》とこの共同体の間に本来あるべき連続性が回復される。

このゲマインシャフトは、非歴史化された道徳的共同体である。死んだ祖先たちー現在生きている《私》ー未生の子孫たちの三者は、歴史の軸を貫いてともにこの共同体に属している。ここで生じているのは、歴史の「圧縮」である。<sup>20</sup>

そして、この道徳的共同体を構成しているのは人間ばかりではない。ハワイの自然もまた、共同体の一部を成している。ピコの名は、《私》を大地（アーイナ）と海（カイ）、つまり自然に「つなぎ戻す」と詩人は歌う。自然は祖先たちと連続するものとして語られている。自然と人間社会の系譜とが、ここでは緩やかに結びつけられている。ここで行われているのは、自然の再道徳化である。（当然ここでは、近代の道具的な自然観、つまり人間の目的を実現する手段としての自然という捉え方は退けられる。）

《私》、ネイション、そして自然——三者は、ピコの名という象徴的紐帯によって結びあわされる。「私の物語」（個人）と「民族の物語」（ネイション）、そして道徳化された「自然」が、連続したものとして関係づけられるのだ。<sup>21</sup> 《私》の存在の本性 nature と、外部の生態的環境としての自然 nature とが、このように無造作な仕方で結びつけられていく。

重要なのは、こうした物語が、未来への希望と倫理的なヴィジョンをもたらしことだ。エスニック・アイデンティティの探求において経験される異常な感覚は、《倫理的で前向きのヴィジョンの（再）創造》と《発見》につながる、とフィッシャーは言う。（363-364）《幻がなければ民は墮落する》（「箴言」29:18a）という聖書

の文言を思わせるこの言葉は、バージェスの詩にも当てはまる。この詩に見える再接続のヴィジョン（幻）は、『イド的なもの』の表出の結果であるだけでなく、倫理的な《精神の共同体》の発見でもある。ピコの名に『つなぎ戻され』た彼女は、ポツエ・カヒコ（祖先たち）の道徳的共同体を発見した。それによって彼女の自尊感情は回復し、『価値の取り戻し』が起る。『私の護符』『私の槍』という詩句が、このことを物語っている。

## まとめ

ハワイ先住民であることの外形的基準は脆弱である。そのなかで、自らを先住民系譜に連なる者として自覚するとはどういうことか。本稿ではこの問いについて、一篇の詩を通して考えてきた。

客観的な真正性 authenticity という基準からこの詩の内容を云々することは、ほとんど無益であろう。むしろ注目すべきは、こうした物語の創出に向けて彼女を突き動かした、『イド的な力』の働きである。『私』と『私たち』の物語を語らずにはおれないという衝動を、私たちは抱えている。バージェスもまた、『私の物語』を語る。『私』とアーイナ（大地）、ポツエ・カヒコ（祖先）が、ピコの名によつて「つなぎ戻された」というのが、彼女のアイデンティティの再構成にあたって創出された物語であった。それは希望と解放に向けての倫理的ヴィジョンをもたらす物語であるとともに、マトリクスへの回帰という人類普遍の希求を表した物語でもあった。ピコの名によるマトリクスへの再接続と、『私』の再統合が、ここでは語られている。

こうした再接続のビジョンは、フロイトの「大洋的感情」論を想起させる。フロイトは「文化への不満」（一九三〇年）の中で宗教的感情の起源を複数挙げている。その一つが、「大洋的感情」と彼が呼ぶものだ。フ

ロイト自身は明言していないが、M・テイラーによれば、大洋的感情とは「母なるもの」への希求に他ならない。それはマトリクス（母胎）への再接続を願い、原初的一体性 Oneness の回復を渴望する心情である（Taylor 62）。《私》たちは、マトリクスに「つなぎ戻」されねばならぬという渴望を抱えて故郷を捜し求める。それは、確かなものを求め、心理的安心 security を希求する、人類共通の態度である。《さみしくなったら、おへソを見よう》。——母胎から切り離されてしまった私たちは、本源的な《さみし》さを克服するために、《おへソ》を見る。存在の根源たる「起源」に触れることによって大洋的感情が満たされ、《私》の生命は回復する。アーイナはバージェスにとつての存在論的準拠——母胎——であった。ピコの名によつて、《私》はアーイナと再接続され、故郷に——子宮に——帰る。これをナイーヴな本質主義と笑うことはたやすい。またそこには、深刻な倫理的陥穽も口を開けて待ち構えている。だが、満たされぬ渴きを抱えて探求を続ける個人を、誰が笑うことができるだろう。

系譜とは、歴史の軸を貫いて生命が連続するさまを語る物語である。それは、人類の大洋的感情から発する起源への希求が生み出してきた、人間的な構築物である。系譜を語るという行為の根底には、《何かダイナミックなもので、しばしば抑えきれない、避けがたいもの》（フィッシャー 35）が存在する。死生学研究という分野にとつて、これは考察に値する問題ではないだろうか。

#### ■参考文献

- Appadurai, Arjun. 1996. *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*. Minneapolis: U of Minnesota P.  
 Burgess, Puanani. 1989. "Choosing My Name." In *Hoanunua: An Anthology of Contemporary Hawaiian Literature*, edited by Joseph P. Balaz.

Honolulu: Ku Pā'a. 40-41.

Fu, Xunning. 1999. "Interracial Marriage and Status Exchange: A Study of Pacific Islanders in Hawaii from 1983 to 1994." *Pacific Studies* 22: 51-71.

Hardy, E. S. Craighill and Mary Kawena Pukui. 2006. *The Polynesian Family System in Ka'u, Hawaii*. Honolulu: Mutual.

Pukui, Mary Kawena, et al. 1972. *Nānā I Ke Kumu (Look in the Source)*. 2 Vols. Honolulu: Queen Lili'uokalani Children's Center.

Taylor, Mark. 1999. *About Religion*. Chicago: Chicago UP.

石川准「アイデンティティの政治学」井上俊他編『岩波講座 現代社会学 15 ——差別と共生の社会学』岩波書店、一九九六年、171-186頁。

ギデンズ、アンソニー（秋吉美都他訳）『モダンティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社、二〇〇五年。[Giddens, Anthony. 1991. *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*. Polity Press.]

フィッシャー、マイケル・M・J（和邇悦子訳）「民族性（エスニシティ）とポストモダンの記憶術」ジェイムズ・クリフォード他編・春日直樹他訳『文化を書く』紀伊國屋書店、一九九六年、361-440頁。[Clifford, James, and George E.

Marcus eds. 1986. *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*. Berkeley: U of California P.]

フロイト、ジグムンド（浜川祥枝訳）『文化への不満』フロイト著作集、人文書院、一九六九年、431-496頁。

## ■注

- 1 堤藤成、「二〇〇九年度社団法人日本新聞協会広告クリエイティブコンテスト」最優秀賞受賞作のキャッチコピー。
- 2 一九九二年に来日した際、バージェスは自らの日系系譜について語った。——父方の祖父母は、一九二五年に熊本県からハワイに移民してきた。彼らは幼い息子を連れていた。後にバージェスの父となるヨシユキである。ヨシユキはクリストファーという英語名を与えられ、日本軍による真珠湾攻撃以降は、日本名をまったく使わなくなった。（プアナニ・バージェス（柳瀬美恵訳）「ハワイ先住民が語る真珠湾五十年」『ひょうご部落解放』46号、一九九二年）

三月、6472頁)。

3 メレディス・B・マクガイア (山中弘他訳) 『宗教社会学——宗教と社会のダイナミックス』明石書店、二〇〇八年、142頁を参照。

4 《重荷》をあえて引き受ける彼女の態度は、ギデンズの《開拓されたリスク cultivated risk》という概念を通して理解しうる。個人は、《危険は克服されるだろうという信頼》の上に、あえてリスクを求めることがある。これが開拓されたリスクである。《このような危険を統制することは、困難な状況を乗り越えられることを自己証明する行為であり、またそれを自他に示すことである》。ハワイ名のみを名乗ることも、こうした自己証明の行為である。彼女のハワイ性は、日系の親類に揶揄される原因だが、バージェスはそのリスクを引き受ける。ピコの名は《重荷》だが、その価値は転換され、希望をもたらす《祝福》《護符》《槍》となる。《開拓されたリスクを引き受けることの恐怖は、……「未来に向かう勇氣」を糧としている》。ギデンズによれば、こうしたリスクの引き受けは、際だって「モダン」な行為である。それは変化と流動性をもたらす行為であるからだ (11)。

5 ステイグマには可視的なものとそうでないものがある(アーヴィング・ゴッフマン (石黒教訳) 『ステイグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房、一九八四年 [Goffman, Erving, 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall], 82-87頁)。ステイグマ・シンボルが可視的で、したがって印象操作や補償努力が不可能な場合、アイデンティティの政治への参加コストは低下する、と石川は言う (178)。ではバージェスの場合どうか。危うさを承知であえて主観的な印象を記せば、バージェスはあまり「ハワイ人らしい」容貌の持ち主ではない。年配のアジア系女性に見える、というのが筆者の印象である。

6 もちろん、ハワイ人が法的に定義されることはある。公的扶助の受給対象を画定するためなどである。だが先住民運動家の多くは、州政府によるハワイ人定義の基幹を「人種主義的」であると批判している。特に、州政府のいわゆる「五〇パーセントルール」を批判する声は多い。これは、「ハワイ人宅地法 Hawaiian Home Commission Act」の適用などに際し、五〇パーセント以上の血統を持つ者のみをハワイ人とする規定である。先住民運動団体の多くは、ハワイ人定義の問題について文化決定主義の立場をとる。血の「量」よりも、「ハワイ人である」という自覚を重視

- 7 する方向だ。たとえばハワイ人団体カ・ラーファイ・ハワイイへは、「ハワイ人の血統をもつ者ならそれがいかなる量でも」加入資格があることになっている。(Ka Lahui Hawaii: 19937, "The Sovereign Nation of Hawaii," Honolulu.)  
かつてハワイ各地では、へその緒に関する民俗儀礼が広く行われた。子が産まれると、親はそのへその緒を人知れず岩陰に隠す。呪い避けのためである。へその緒を放置すれば、悪意ある他人に盗まれたり、ネズミにかじられたりする恐れがある。それは非常に危険なことだった (Pukui, et al 2:29; Pukui and Handy 78)。へその緒が「傷つきやすいもの」と考えられたのは、おそらくそれが「移行」の状態と関わっているためだろう。M・ダグラスによれば、諸文化において出生以前の小児は「傷つきやすくしかも危険なもの」として扱われる。(メアリ・ダグラス(塚本利明訳)『汚穢と禁忌』ちくま学芸文庫、二〇〇九年、129頁)「危険は過渡期に存在する。(ヴァン・ジュネップ)。新生児は、子宮から人間社会への——ハワイ語の語彙では、ポーロ。(闇)からアオロ。(光)への——移行の途上にあるある状態からある状態へ移行中のものは、ダグラスによれば「アノマリーなもの」であり、不安定で不定形であるがゆえに危険とみなされる。
- 8 眠っている間に当人のウハネが頭から出て行き、外を歩き回ることもある。逆に、良い霊や悪い霊が、頭から入りこんで人に憑依することもあるとされた。(Pukui, et al. 1:182)
- 9 ピコには、単に肉体の一部としての頭頂部、あるいは物体の頂点という語義もある。Pukui and Elbert 参照。  
ハンナ・アレント(志水速雄訳)『人間の条件』未来社、一九七三年、第一章参照。
- 10 ピコのいずれの語義にも、「結びつけると同時に分け隔てる介在者」という含意が見られる。へその緒(およびその痕跡たるへそ)は、母と《私》とのつながりのしるしである。同時に、両者がお互いに異なる個体であることとしるしでもある。一体ではないがこれ以上なく不可分という、母子関係の密接さのニュアンスは、どの語義においても共有されている。
- 12 前近代社会において、伝統は二つの役割を果たしていたとギデンズは言う。第一に、時間を秩序化する役割である。伝統的な実践様式が支配的なところでは、《時間は空虚なものではなく、一貫した「存在の様式」が未来を過去と関係づける》。第二に、伝統は、《認知的要素と道徳的要素を混合する、事物の確かさの感覚を創り出す》(52)。パー

- ジェスの生きる現代ハワイにおいて、ハワイ先住民の民俗伝統は、もはやどちらの役割も果たしえない。彼女の一種「キメラ的」なピコ概念の創造は、そうしたなかでなお、「確かなもの」を求めようとする格闘の産物である。
- 13 ギデンズ 200頁。ただ、ギデンズは「伝統社会」と「近代社会」を二分法的に捉えすぎている、という批判も成り立つだろう。
- 14 伊藤雅之、「宗教・宗敎性・靈性——文化資源と当時者性に着目して」国際宗敎研究所編『現代宗敎 2001』49-65頁参照。T・ルックマンの「見えない宗敎」論もまた、このような「消費主義的」な選択行動と、個人の選択から成る自己アイデンティティの構築に注目していた。ルックマン、トーマス（赤池憲昭、ヤン・スインゲドー訳）『見えない宗敎』ヨルダン社、一九七六年 [Luckmann, Thomas, 1967. *The Invisible Religion: The Problem of Religion in Modern Society*. NY: Macmillan.]。
- 15 註14参照。
- 16 フィッシャーは、「イデオ的なもの」に関連して次のように説く。《言語にはそれ自体の内に感情的な共鳴を起こすメタファーや知識や連想の層が沈殿しており、そういったものは注意が向けられると、発見や啓示として経験されることが可能である》(206)。パージェスの場合、ピコという語に沈殿していた知識や歴史の層に注意が向けられたということになる。
- 17 フィッシャーの議論には宗敎論を思わせるところがある。たとえば、カール・バルトの以下の議論と比較せよ。人間は神への信頼から神認識に、認識から信仰告白へ至る。認識は、神から理性の照明を与えられることよつてのみ可能である。このようにして「認識」を与えられた人間は、信仰の「告白」に至る。(井上良雄訳『教義学要綱』新敎出版社、一九九三年、二章く四章。)一方フィッシャーは、『外部』から『イデオ的な力』の働きかけがまず生じ、次いで『自己定義の努力』が求められると説明している。
- 18 ここでピコの名は、過去の道徳的共同体(系譜)との交わりを可能にする「媒体 medium」・経路であると同時に、経路を開く「原因」を生む発動者でもある。
- 19 集団の「記憶」と個人の「伝記」とは、しばしば並行して語られる。《当初には個人的な自伝的探究と思われたもの

が、伝統の啓示、バラバラになったアイデンティティの再回収、懐れた器からほとぼしる神聖な閃光の再回収となる（フィッシャー367）。

20 E・サイドは、A・カミュの小説「不貞」を論じた文章で、体験による「歴史の圧縮」について論じている。（エドワード・W・サイド（大橋洋一訳）『文化と帝国主義』みすず書房、一九九八年、333頁）。ただしサイドは、帝国主義批判という、本稿とは異なる文脈でこの語を用いている。

21 ここにはある倫理的な危うさが潜んでいる。それは地理学者A・ベルクが指摘しているものだ。個人のレベルでは「母の胎内」に、集合的なレベルでは「自然状態」に、それぞれ郷愁を覚える人間の心情を、ベルクは危険視する。こうした全体論は、人間存在を「非主体」に格下げするからだ（110）。バージェスの詩も、このような危うさを潜めている。なお、前出のM・テイラーも、原初的根源への回帰を救済とみなすニーチェやハイデガールの「原初主義」や「直接性への意志」が、現実にはドイツの戦争犯罪を引き起こし、西洋文明にダメージを与えたことを指摘している。（Taylor 65-73）バージェスの詩に表れているような、ハワイ先住民運動における歴史性の捨象については、批判の声も上がっている。たとえば Conklin, Kenneth R. 2007. *Hawaiian Apartheid: Racial Separatism and Ethnic Nationalism in the Aloha State*. E-Book Time, print-on-demand. を参照。

22 註21を参照。

（たけむら・はつみ 多摩大学グローバルスタディーズ学部・中央大学法学部非常勤講師）

## My *Piko* (umbilical) Name that Connects Me with My Ancestors and Descendants: A Reflexive Project of the Self by a Modern Hawaiian Poet

Hatsumi Takemura

This article focuses on a contemporary poem, in which a Hawaiian word *piko* appears. It was published in 1991 under the title of “Choosing My Name.” The author, Puanani Burgess, was born with multiple ethnic backgrounds, but came to identify herself as an indigenous Hawaiian at some time in her life. The subject of this poem is her realization of being Hawaiian.

The linchpin of the whole poem is a Hawaiian word, *piko*. This ancient word has a wide variety of meanings, including the umbilical cord, the navel, the fontanels, and the genital organs, but at the root it means a part that connects two objects. In the classical Hawaiian culture, the notion of *piko* was closely related with the idea of genealogy. In this contemporary poem, this “traditional” notion serves as a reminder of the forgotten past of the imagined Hawaiian nation. This article discusses how the poet tried to re-imagine her Hawaiianess by reactivating the notion of *piko*.

This approach results in several conclusions. First, the poet appropriated the traditional notion of *piko* to cope with the real-life situation she had been facing. Born with multiple ethnic backgrounds, her identity tended to diffuse, but her *piko* name served as the symbolical bonds to connect her to the Hawaiian nation. Secondly, the poet played a passive role, as well as an active one, in the process of reconstructing her identity. She understood the symbolical bonds as something she had been given, not as she had chosen herself. Thirdly, this poem exemplifies the general desire to be “connected back” to a *Gemeinschaft*. She made the use of the

image of *piko*, or an umbilical cord that connects a fetus to the womb, to express her emotional connection with the ethnic past. On the whole, the poem speaks of her struggle to reconstruct her identity through activating the traditional idea of *piko*. Her attempt can be understood as what Anthony Giddens calls “the reflexive project of the self”.